

背景・課題

- 国際的な頭脳獲得競争の激化の中で我が国が生き抜くためには、**優れた研究人材が世界中から集う“国際頭脳循環のハブ”**となる研究拠点の更なる強化が必須。
- WPI拠点がこれまでに培ってきた強みや生み出してきた成果を最大限に活かしていくため、**国際頭脳循環や拠点間連携**を更に推し進めていくことが重要。

【未来投資戦略2018における記載】

世界を先導する経済的・社会的価値の創出に向け、**我が国の基礎科学力・人的基盤の強みを最大限に活かして、世界の第一線で活躍する人材の糾合の場となり国際頭脳循環の核となる世界トップレベルの研究拠点** (中略) **の形成を着実に進める。**

事業概要

【事業目的・実施内容】

大学等への集中的な支援を通じてシステム改革等の自主的な取組を促すことにより、高度に国際化された研究環境と世界トップレベルの研究水準を誇る「目に見える国際頭脳循環拠点」の充実・強化を着実に進める。



2019年度予算要求のポイント

- ①世界トップレベル研究拠点の充実・強化に向けた取組を引き続き着実に推進。
- ②WPI拠点としてこれまでに培ってきた強み・成果を最大限に活かしていくため、**国際頭脳循環の深化や拠点間連携の強化**に向けた取組を更に推進。

【拠点が満たすべき要件】

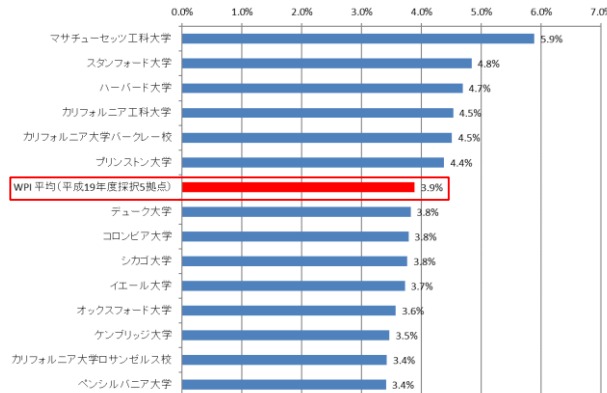
- 総勢70~100人程度以上 (2007, 2010年度採択拠点は100人~)
- 世界トップレベルのPIが7~10人程度以上 (2007, 2010年度採択拠点は10人~)
- 研究者のうち、常に**30%以上が外国からの研究者**
- 事務・研究支援体制まで、すべて**英語が標準**の環境

【事業スキーム】

- 支援対象：研究機関における基礎研究分野の研究拠点構想
- 支援規模：最大7億円/年×10年 (2007, 2010年度採択拠点は~14億円/年程度)
※拠点の自立化を求める観点から、中間評価後は支援規模の漸減を原則とし、特に優れた拠点については、その評価も考慮の上、支援規模を調整
- 事業評価：ノーベル賞受賞者や著名外国人研究者で構成される**プログラム委員会**やPD・POによる**丁寧かつきめ細やかな進捗管理**を実施
- 支援対象経費：人件費、事業推進費、旅費、設備備品等費
※研究プロジェクト費は除く

【これまでの成果】

(参考) 2007年度採択拠点の質の高い論文の輩出割合※



- 世界のトップ機関と同等以上の卓越した研究成果
- 平均で研究者の**40%以上が外国人**
- 民間企業や財団等から大型の寄付金・支援金を獲得

例：大阪大学IFReCと製薬企業2社の包括連携契約 (10年で100億円+a)

※WPI拠点から輩出された論文のうち、他の研究者から引用される回数(被引用数)が多い順にランキングした際、上位1%にランクインする論文の割合

(「Web of Science」のデータ(2007年~2015年)を基にJSPSにおいて算出)

【WPI拠点一覧】

WPIアカデミー拠点 (2007年度採択 5拠点)

- 東北大学 材料科学高等研究所 (AIMR) 小谷 元子
- 物質・材料研究機構 国際ナノ・マイクロ研究拠点 (MANA) 佐々木 高義
- 京都大学 物質-細胞統合システム拠点 (iCeMS) 北川 進
- 大阪大学 免疫学フロンティア研究センター (IFReC) 番匠 静男

補助金支援中の拠点 (2010年度採択 1拠点)

- 九州大学 カーボンナノテクノロジー国際研究所 (I2CNER) Petros Sofonis

2012年度採択 3拠点

- 筑波大学 国際統合睡眠医科学研究機構 (IIIS) 堀野 正史
- 東京工業大学 地球生命研究所 (ELSI) 栗原 敬
- 名古屋大学 トランスオミクス生命分子研究所 (ITbM) 伊丹 健一

2018年度採択 2拠点

- 東京大学 カブリ数物連携宇宙研究機構 (Kavli IPMU) 梶山 青
- 北海道大学 化学反応創成研究拠点 前田 博
- 京都大学 構成的ヒト生物学研究拠点 高橋 達紀

2017年度採択 2拠点

- 東京大学 ニューロケミカル国際研究機構 (IRC) Takao Hensch
- 金沢大学 ナノ生命科学研究所 (NanoLSI) 堀野 正史

※10年間の支援期間終了後、更に5年間の補助金支援期間延長が認められている。